

第 46 回日本医療薬学会公開シンポジウム開催報告

実行委員長 秋田大学医学部附属病院 薬剤部
三浦 昌朋

平成 24 年 7 月 28 日（土）秋田市にぎわい交流館において第 46 回日本医療薬学会公開シンポジウムを開催致しました。同日、日本臨床腫瘍学会学術集会と重なっていたにも関わらず、秋田県はもとより、東北の各県、関東、北陸、四国から 85 名の方々にご参加いただき、盛会のうちに無事終了することができました。

本シンポジウムは、「今、薬剤師に求められる抗がん剤治療マネジメント」をメインテーマとしました。基調講演では、秋田大学医学部血液腎臓膠原病内科学講座の高橋直人先生から、慢性骨髄性白血病に対する分子標的薬（TKI）療法で実践している血中濃度マネジメント（TDM）と個別化療法についてご講演頂きました。TKI の TDM は、未だ有効な治療方法がない医療ニーズ（Unmet medical needs）のみならず、全ての患者に対するテーラーメイド医療または Personalized medicine に展開していく可能性を秘めることを、自施設で行われた臨床研究の結果を中心にご教授頂きました。

シンポジウムでは、実際の医療現場において抗がん剤の適正使用に関する情報提供に当たっている 3 名の先生方からご講演頂きました。最初に、東北大学病院薬剤部の島田美樹先生から、ソラフェニブの副作用マネジメントにおいて、検査値および臨床所見に加えて、個々の患者における薬物動態を評価することが極めて有用であることをご講演頂きました。次に、北海道大学大学院薬学研究院臨床薬剤学研究室の山口浩明先生から、DCF 療法の各 3 抗がん剤の血中濃度解析結果と遺伝子型解析結果に加え、多剤併用時の各抗がん剤の血中濃度測定意義をご講演頂きました。最後に、秋田大学医学部附属病院薬剤部の藤山信弘先生から、スニチニブの副作用発現予測にトラフ濃度が有用な指標となりうることをご講演頂きました。本シンポジウムを通して、今、薬剤師に求められる抗がん剤治療マネジメントとして、抗がん薬の TDM が非常に有用なツールとなりうることを認識致しました。

総合討論では、臨床医の立場から高橋先生より各シンポジストの先生方へ、今後、抗がん剤の TDM 研究を継続して行っていくことの重要性についてコメント頂きました。会場からも積極的な意見や質問があり、シンポジウムの予定時刻を超過するほどの盛況でした。

最後に、講演を快く引き受けて頂きました演者の先生方、並びに会場運営に協力頂きました秋田大学医学部附属病院薬剤部スタッフ一同に心より感謝申し上げますと共に、終始懇切丁寧にご対応頂きました日本医療薬学会事務局の方々に心よりお礼申し上げます。